

# 中編篇

## 映画文学人生論

- 0761) 何処へ 正宗白鳥 (1908)  
0771) 別れたる妻へ送る手紙 近松秋江 (1910)  
0781) 神経病時代 広津和郎 (1918))  
0791) 藏の中 宇野浩二 (1919)  
0801) 子をつれて 葛西善藏 (1919)

中編小説は中途半端な長さの小説である。  
帯に短く、襷に長し。

中編小説は四百字詰原稿用紙で八十枚から三百枚程度とされているようだが、はつきりした定義はない。要するに、短編小説より長いが、長編小説ほど長くはないのが中編小説というらしい。

明治時代から新聞雑誌に掲載された小説のほとんどが中編小説で、おびただしい数にのぼる。その中から作者の出世作かつ代表作であり、自然主義文学の方法により人情（百八煩惱）を描いている作品として次の五篇を選んだ。

- |            |      |
|------------|------|
| 何処へ        | 正宗白鳥 |
| 別れたる妻へ送る手紙 | 近松秋江 |
| 神経病時代      | 広津和郎 |
| 藏の中        | 宇野浩二 |
| 子をつれて      | 葛西善藏 |

いずれも明治四十一年から大正八年までの約十年間に発表された。平成二十六年の現在から数えると、百年以上も前の古い小説で、本屋の店頭ではめったに見かけることもないが、古本屋か図書館を利用すれば読むことができる。

私も読んだのは今回がはじめてだが、水源を見つけたような新鮮な面白さがあると思った。描かれている人情（百八煩惱）は、平成の現代の中編小説とそれほど変わらない。つまり、坪内逍遙の



## 中編篇

映画文学人生論

説く小説神髄の理論が田山花袋の『蒲団』にはじまって、これらの五篇に継承され、その同工異曲の中編小説が平成の現代に至るまで量産され続けているのではなからうか。

では、なぜ主人公が愚かな煩惱にふりまわされているこの五篇に新鮮さを感じたのかを考えてみると、煩惱の彼方に理想へのあこがれが感じられるからではないかと思う。

自然主義の作家も理想へのあこがれを抱いていた。けしからんとは思わない。煩惱にふりまわされても理想へのあこがれを失わないのが人間の心理としては自然である。

人道主義、理想主義の作家としてはロシアの文豪トルストイが有名だが、五人の作家は全員がトルストイの影響を受けて、倫理感と芸術家意識が強い。破滅型作家葛西善藏でさえも『贗物』の主人公にトルストイの『光の中を歩め』を読ませている。善藏の戒名は「藝術院善巧酒仙居士」。

近松秋江は『幼年時代』と『少年時代』を翻訳し、広津和郎と宇野浩二は『戦争と平和』を翻訳した。正宗白鳥は、トルストイ晩年の家出の原因が、妻君のヒステリーだったところに、人生の鏡を見る思いがすると述べ、広津和郎は『怒れるトルストイ』でトルストイが「汝怒るなかれ」という戒律に反した事実を指摘した。

めでたさも中くらいなり、おらが春 小林一茶